

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授



複雑なものを理解するために、人類はものごとを細かく分けて考える「分析」という方法を使ってきた。分析はデカルト以来の普遍的な方法で、多くの学問もこれによっている。物理学がものを素粒子に分けるのも、生物学が

生命現象をDNAレベルに落として考えるのも、みな分析の方法の一つである。しかし最近の学問は、あまりに細分化が進みすぎて、ものごとをトータルに理解できなくなってしまう。生物学は、DNAの分析技術は進んだというのに、生命とは

全体の見えない「分析」

何かという根本的な問いには明確に答えられないでいる。素粒子物理学も、物質とは何か、という究極の問題には答えていない。人間とは何か、を研究する学問である人文科学も、哲学、倫理学、宗教学などに細分され答えは一向にみえない。

うというのだ。人体の研究になぞらえて言えば、個々の臓器や細胞の動きを細かく調べたうえで、さらにそれを統合して人体の機能をトータルに理解しようとする方法、ということになる。しかし、「統合」のプロセスは、ものごとをばらば

らはこのことに気づき、1970年代に「タオ自然学」を著した。この中でカブラは、物理学の発想の中に、東洋思想ときわめて似た一面があることに触れている。一線の物理学者が東洋思想を勉強したというのはじつにおもしろい。東洋思想という

「あるがまま」に見てみよう

この反省から、最近では、分析で得られた知識をとりまとめてそれを統合する分野横断―分野統合の方法が模索されるようになってきた。それは、ものごとを違った角度から見るというだけではない。違った角度から見ただけならバラバラなイメージを統合して、ものごとをあるがままにとらえよ

らにとらえる分析が先にあったから必要になったに過ぎない。いっぽう世界には、ものごとを分析せず、あるがままトータルに見ようという考えが昔からあった。おもしろいことに、道教など東洋の思想の中にはこうした方法をとるものが多い。物理学者F・カプ

れは偏見だ。行き詰まった思考を解きほぐすためにも、一度あるがままにものごとを訓練してみるのもよいかもしれない。とくに、出口が見えない現代社会の未来を考えるブレイクスルーには頭の切り替えが重要なものかもしれない。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。